

進捗状況の概要 【1ページ以内】

本事業の目的は、鹿児島の地の利（Location）を活かした魅力的な受入プログラムを開発し、米国からの留学生受入を増加させることにある。さらに事業終了後の上位目標として、プログラム運営を通して外国人留学生の受入体制を整え、教育の国際通用性を高める。また、プログラムを地域と連携して実施し、その成果を地域に還元することを通して、大学が地域のグローバル化を牽引する役割を果たす。これらの目的を達成するため、(1) 受入プログラム開発、(2) 海外パートナーとの連携強化、(3) 地域との連携強化、(4) 全学実施体制の整備の4点を重要課題として進めてきた。以下、進捗状況について記す。

(1) 魅力的な受入プログラム（連携大学との国際協働学習コース）の開発

本事業では、全学から学部研究科が参与し、各専門に基づくリサーチ・プログラムを開発し、米国とアジアの三大学連携によって、オンライン国際協働学習（COIL）と学生の派遣・受入を実施している。2019年度までに上級8コース（日本文化論、臨床獣医、島嶼へき地医療、食料生産、食の安全、食と健康、ナノバイオ、環境建築デザイン）を開発し、総合大学の強みを活かして多分野のコースを整え、計画を上回る人数の学生交流を行った。全コース共通のテーマとして「多極化する世界をつなぐ」を掲げ、鹿児島をフィールドに日本と米国とアジアの学生が意見を交わし、世界が抱える課題に対して協働で調査研究を行う本プログラムは、海外連携校による評価も非常に高い。このことは、三大学合同の鹿児島での調査実習とCOILとを組み合わせた本プログラムの教育効果について検証し、米国の国際看護研究大会で報告を行った島嶼へき地医療コースの事例からも明らかである。

(2) 海外パートナーとの連携強化

初年度に海外連携校から教員を招聘し、事業目的や内容について理解と協力を深め、プログラム協定の締結を進めた。事業開始以前の米国大学との交流は、本学からの派遣が中心であったが、本事業により受入とCOIL協働学習が加わり、双方向交流へと発展した。派遣・受入における学生支援金が限られている中で、自費あるいは連携大学の支援によって、計画以上の学生がプログラムに参加した。また、本学学生の派遣時には、多くの連携大学で宿舍の提供などの協力が得られた。参与する連携大学の数も、事業開始時の15校（米国7校とアジア8校）から18校（米国9校とアジア9校）へと拡大した。本事業における連携大学以外の海外協定校2校からも、自費による本プログラムへの参加があり、プログラムの発展や事業終了後の継続性の見込みが立ちつつある。

(3) 地域との連携、成果還元

初年度のキックオフ・シンポジウムには地域の関係機関も招待し、理解と協力を求めた。また、受入プログラムを実施する際には、地元企業、教育機関、医療機関、自治体、市民の協力を得て、各コースの専門的見地から地域課題について学ぶための視察やインタビュー調査を行い、課題分析や提言等の成果をポスターやビデオの形にまとめ受入先機関へ還元した。さらに、グローバルセンターが中心となってホームステイ説明会を開催し、外国人学生の受入に関心のある市民の登録とマッチングを行った。2019年度は15名の外国人学生にホームステイ体験を提供することができた。

(4) 実施における制度・環境の整備

各コースの担当教員を中心に事業責任者を委員長とする本事業運営委員会を設置した。COIL推進のため、遠隔特別聴講学生の制度を作り、海外連携大学の学生に在籍資格を与え、本学のLearning Management Systemへのアクセス権付与を可能にした。これによりオンライン授業やダブルディグリーの基盤を整えた。本事業のHP開設、冊子の発行と配布、SNSを開設・運営し、海外連携校のプログラム参加者へ継続的な情報提供を行った。

【本事業における中間評価までの交流学生数の計画と実績】

（単位：人）

2018年度				2019年度			
派遣		受入		派遣		受入	
計画※	実績	計画※	実績	計画※	実績	計画※	実績
8	31	44	44	118	131	72	82

※海外相手大学を追加している場合は、追加による交流学生数の増加分を含んでいる。

特筆すべき成果（グッドプラクティス）【1ページ以内】**1. 国際協働により、グローバルな視点で地域課題を捉える**

受入と派遣を双方向に行うことで、特定の課題に対し、世界の状況と鹿児島の状況を比較検討することができ、両者に共通する問題の普遍性と社会や文化に根ざした固有の表れ方を理解することができた。例えば、島嶼へき地医療コースでは、鹿児島の学生は三島村、米国の学生はケンタッキー州農村部、韓国の学生は江華島を対象に、社会経済的背景や医療体制についてオンライン国際協働学習を行った。その後、本学学生が米国や韓国を訪問し、逆に米国と韓国の学生は鹿児島を訪問した。実際のフィールドでの合同調査では、米国学生は英語が通じない初めての経験の中で、言葉を越えた人とのつながりに気づくなど、看護理論の相互浸透行為に通じる普遍的課題に向き合った。また、どう患者を支援するか、ヘンダーソン 14 の基本的ニーズ（食事支援、排せつ支援等）について三国の学生が議論した際には、文化による支援方法の相違と共通性が明らかになった。食の安全コースでは、米国やタイの学生と連携し、食品安全の国際基準と管理手法（HACCP）について協働学習を行った。鹿児島では、本学学生とチームを組んで地元の魚市場や食品工場を見学し、製造過程のどこで異物混入や汚染が起きる可能性があるのか、ハザードポイントを調査した。米国やタイでも同様の調査を行い、各国の食品管理の制度や現状を知り、改めて鹿児島の食品業界の問題を理解し、解決策の提示に取り組んだ。このように全コースで特定の課題に対する協働学習を行い、国や地域の対応の相違とその原因について、自国から見るだけでなく、グローバルな視点から分析することが可能になった。

2. 学部間の異分野連携により、地域課題の解決策を模索

2019年度末に学生が中心となり、全コースの学生が一堂に会する国際学生会議（英語）を開催し、コース別の研修成果を共有し、共通する課題について議論を行った。コース別に学生は事前にオンラインで海外連携大学の学生からも意見を集めて会議に臨んだ。ディスカッションでは、食、健康、安全、環境などの人の命や暮らしに関わる課題は、一つの学問分野だけでは解決不可能であること、つまり、グローバルな協働学習に加えて異分野連携による協働学習が必要なことが明らかになった。例えば、臨床獣医コースは、One World One Health の考え方を基本に米国と台湾と鹿児島が連携して越境性感染症に取り組んでいる。感染症は各国によって種類が異なるが、動物から人へ、人から人へ国境を越えて広がる。動物や人を取り巻く環境（生態系）は繋がっており、生活スタイル（文化）や各国政治も発生や拡大に大きな影響を与えるため、複数の分野が協働で課題解決にあたる必要がある。こうした考え方が全体で共有され、折しも新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の拡大によって2020年度の派遣・受入コースの実施が不可能になる中、異分野融合のコースを学内に立ち上げ、学際的な調査（国内）や議論を行い、地域課題の解決策を模索することと、合同調査の内容や成果をオンラインにより連携大学に提供する取組を始めるという方向性が得られた。

3. グローバルリーダー育成と草の根の国際交流、オンラインの活用

本事業では、米国とアジアと鹿児島の学生の協働を通して、世界を視野に入れたグローバルリーダーの育成を行うと同時に、草の根の国際交流にも力を入れた。派遣と受入の両プログラムに地域住民の協力を得てホームステイを組み込み、本事業が目標とする民主的な秩序や共生の枠組の構築に、リーダー育成と草の根の国際交流との双方向から取り組んだ。また、オンラインの活用によって通常の授業に海外連携大学の教授陣による講義や学生との議論を取り入れ、交流人数の増加と交流の日常化を達成した。オンラインで研修の一部を行うことで、米国の食品管理技術者に必要な資格（PCQI）の取得が可能になったコースもある。一方、派遣・受入における直接交流の重要性も明白になった。例えば、日本文化論コースでは、大人数の授業であったにもかかわらず、海外研修への参加学生が議論を主導したことで、オンライン上の活発な交流が可能になった。ナノバイオコースでは、三大学の一流講師陣による講義23編からなる「科学・バイオテクノロジー上級講義」が開設され、受講学生はオンラインでレポートを講義担当者に提出し、大学の枠を越えて指導を受けることが可能になったが、こうした恵まれた教育環境を主体的に利用し、高い学習成果を上げたのは、海外研修に参加した経験のある学生であった。実際に連携校を訪問し、シンポジウムで研究発表を行ってコメントをもらった体験や、コースワークで連携校の実験室にある装置の説明を受け、データが得られた背景や研究環境を理解した体験等が学習意欲を引き上げ、リーダーシップを涵養したと考えられる。